

## 日本語版未来結果熟慮尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

井上 美沙

駒澤大学大学院人文科学研究科

有光 興記

駒澤大学文学部

### 問 題

先の見通しを立てるということは、それが目前のことであっても遠い将来のことであっても少なからず誰もが日常生活で行うことであろう。そのような、将来への見通しを持つことは、これまで心理学領域においては、時間的展望 (time perspective) の中でも未来展望という構成概念を中心に研究が展開している。

Strathman, Gleicher, Boninger, & Edwards (1994) は、未来展望と関連して未来に対する思考 (future thought) に注目し、未来結果熟慮 (consideration of future consequences : 以下 CFC と記す) に関する研究を行った。CFC とは、今現在の行動が未来の結果にどのような影響を及ぼすかを熟慮し、未来の結果によって個人が影響を受ける傾向のことである (Strathman et al., 1994)。すなわち、自分の望む未来の結果に達するためには、今、何をしなければならないかを考える程度のことである。Strathman et al. (1994) は、環境保護行動や健康への関心、喫煙行動に対して、CFC が時間的展望や希望、楽観性の説明力を除いてもなお説明力を持つことを階層的重回帰分析を用いて明らかにしている。また、Ouellette, Hessling, Gibbons, Reis-Bergan, & Gerrard (2005) は、有酸素運動 (例えば、ウォーキングやステーションナルサイクリングなど) の運動量の上昇を目標とした実験を行い、CFC 傾向の高い人は、有酸素運動を継続して行うことが可能であることを示した。

CFC 尺度には日本語版が存在しない。そこで本研究では、Strathman et al. (1994) の作成した尺度を日本語に翻訳し、因子的妥当性、内的整合性、構成概念妥当性を検討する。構成概念妥当性の検討には、Snyder 希望尺度 (篠原・勝保, 2001)、時間的展望体験尺度 (白井, 1994) を用いる。これらの尺度は、CFC 尺度と同様に、未来の見通しを立てて活動するという側面において共通点があり、先行研究においても CFC 尺度は希望や時間的展望との間に正の相関が示されている (Strathman et al., 1994)。

### 方 法

**調査期間** 2006年7月から10月であった。

**調査参加者** 東京都、兵庫県、大阪府の大学と専門学校に在籍する学生 190名 (男性 59名, 女性 131名) が参加し

た。また、幅広い年齢層から回答を得るため、兵庫県、大阪府に在住する就労人、主婦、定年退職者他を含む 82名 (男性 34名, 女性 48名) の合計 272名 (男性 93名, 女性 179名) に配布、回収した。平均年齢は 27.8歳 (範囲: 18~72歳, 標準偏差 = 12.3) であった。

**質問紙** (a) 日本語版 CFC 尺度 Strathman et al. (1994) の作成した原版を原著者に許可を得た上で日本語に翻訳し、職業翻訳家によってバックトランスレーションが行われた。その後、項目内容の確認を行い、日本語の質問項目を完成させた。質問は、12項目からなり“全くあてはまらない (1点)”から“かなりあてはまる (5点)”までの5件法で、得点が高いほど CFC 傾向を有するとした。

(b) Snyder 希望尺度 Snyder, Harris, Anderson, Holleran, Irving, Sigmon, Yoshinobu, Gibb, Langelle, & Harney (1991) によって作成された尺度を篠原・勝保 (2001) が日本語に翻訳したものをを用いた。この尺度は相互関連する、目標に到達するための筋道を見出す能力である pathways thoughts (以下, pathway とする)、目標に向かって活動を維持する能力である, agency thought (以下, agency とする) という2つのプロセスからなる。原版と同じ2因子とダミー項目 (各4項目) の合計12項目で構成され、“まったくそうでない (1点)”から“まったくそうだ (4点)”までの4件法で、得点が高いほど希望傾向が高いことを示す。

(c) 時間的展望体験尺度 白井 (1994) によって作成された尺度で、目標指向性 (“毎日の生活が充実している”などの項目)、希望 (“私にはだいたい将来の計画がある”などの項目)、現在の充実感 (“毎日の生活が充実している”などの項目)、過去受容 (“過去のことはあまり思い出したくない”などの項目) の4つの下位尺度から構成される。各項目は、“あてはまらない (1点)”から“あてはまる (5点)”までの5件法で、得点が高いほど時間的展望体験の傾向が高いことを示す。

**手続き** 質問紙調査は、学生には講義時間を利用し、集団法自記式で施行した。その他の参加者には、スノーボール式により配布し、無記名で郵送回収を行った。

### 結 果

**因子分析** 記入もれによるデータを無効として 247名を対象に分析を行った。1~3因子解を探索的に指定した因子

Table 1 日本語版 CFC 尺度の因子分析結果と平均値と標準偏差

| No | 項目内容                                                                      | 因子<br>負荷量 | M    | SD   |
|----|---------------------------------------------------------------------------|-----------|------|------|
| 11 | 私は、目前の関心事を満たすためだけに行動し、将来の問題はあとで対処できると考える *                                | .77       | 3.60 | 1.03 |
| 10 | 私は、将来の結果は後で対処することが可能であるので、今を犠牲にすることはたいていは不必要であると思う *                      | .60       | 3.49 | .98  |
| 3  | 私は、将来のことは放っておいてもなんとかなるだろうと考えて、ただ目の前の関心事を満たすために行動している *                    | .58       | 3.11 | 1.15 |
| 9  | 危機的な水準に達する前に問題は解決されるだろうと思うので、私は、一般的に将来起こりうる問題に関する警告は気にしない *               | .48       | 3.61 | .93  |
| 2  | 私は、しばしば長い間結果が出ないことを達成するために特定の行動をしている                                      | .43       | 2.88 | 1.28 |
| 7  | 私は、たとえ否定的な結果が長い間生じなくても、否定的な結果に関する警告を真剣に受けとめることは重要であると思う                   | .43       | 3.90 | .83  |
| 8  | 私は、それほど重要でないすぐに結果が出る行動よりも、重要で遠い将来の結果につながる行動をするほうがより大切であると思う               | .42       | 3.66 | 1.02 |
| 1  | 私は、将来どんなことが起こるであろうかということや、また、そのような出来事が日々の私の行動にどのような影響を及ぼそうとしているのかをよく考えている | .41       | 3.14 | 1.15 |
| 6  | 私は将来の結果を達成するために、今現在の幸福や快適な暮らしを犠牲にすることは惜しまない                               | .36       | 2.84 | 1.09 |
| 12 | 私の日々の仕事は、具体的な結果であるので、遠い先の結果である行動よりも私にとって重要である *                           | .32       | 2.81 | .88  |
| 5  | 私が決めることや、私がとる行動は私の都合に起因する *                                               | .21       | 2.51 | 1.01 |
| 4  | 私の行動は、単に自分の活動の直後（数日または数週間の間）の結果に影響を受ける *                                  | .17       | 3.06 | 1.03 |

注. 逆転項目は、\*印で示した。

Table 2 CFC 尺度関連因子との相関関係と信頼性

|             | 希望      |        | 時間的展望体験 |      |        |        |
|-------------|---------|--------|---------|------|--------|--------|
|             | pathway | agency | 目標指向性   | 希望   | 現在の充実感 | 過去受容   |
| CFC         | .165**  | .244** | .408**  | .062 | .032   | -.160* |
| $\alpha$ 係数 | .71     | .69    | .84     | .73  | .83    | .78    |

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

分析（重み付けのない最小2乗法、プロマックス回転）を行った結果、1因子構造での解釈が最も良好であり、妥当であると判断した。質問項目4, 5, 12においては負荷量が.35より低い値であった（Table1）。以後、負荷量が.35以上であった日本語の9項目をCFC尺度とする。

**信頼性分析** 次に、CFC尺度9項目の信頼性分析を行ったところ、Cronbachの $\alpha$ 係数は.74であった。他の尺度における $\alpha$ 係数は.69-.88であった。

**妥当性の検討** CFC尺度と他の下位尺度間では、pathwayとagency、目標指向性に正の相関（ $p < .01$ ）が認められ、過去受容には弱い負の相関（ $p < .05$ ）が認められた（Table 2）。また、CFC尺度と年齢の間には有意な相関関係は認められなかった。

## 考 察

本調査では、CFC尺度の日本語版を作成し、その妥当性と信頼性の検討を行った。まず、因子分析によって日本語

版のCFC尺度が、原版（Strathman et al., 1994）と同じ1因子構造であることが明らかとなり、因子的妥当性が確認された。Strathman et al. (1994) では、因子負荷量の範囲(.30-.72)のみが記述されており、本研究との因子負荷量の違いを確認できなかったが、本調査で因子負荷量の高くなかった3項目については、文章表現を改める等、項目の内容を今後再検討する必要があるだろう。また、信頼性分析では、CFC尺度において、ほぼ満足しうる内的整合性が確認された。CFC尺度と各下位尺度間の相関分析では、pathwayやagency、さらに目標指向性において正の相関が示され、構成概念妥当性が確認された。また、この結果から、CFC尺度が目標達成のために筋道を見いだす思考や、計画に沿って活動を維持する能力と関連があり、自身が望む未来の結果に対し、積極的・活動的な思考側面を持つことが示唆された。なお、時間的展望体験尺度における希望は、項目内容が漠然とした希望を扱っており、未来に対する希望的思考を測定していないため、相関が認められなかった

ものと考えられる。

今後、わが国でも CFC 尺度と健康行動や幸福感との間に関連が認められれば、それらを高めることを目的とした応用研究が可能になるだろう。また、CFC 尺度に含まれる未来熟慮は、問題解決を引き出す可能性があるが、一方で状況を否定的に捉えることにつながり、不安や抑うつを経験し、それを中和するための強迫行為を引き起こす可能性もある (Salkovskis, 1985)。こうした CFC 尺度と精神症状との関連が明確になれば、CFC 尺度の臨床場面での応用も可能となるだろう。

#### 引用文献

- Ouellette, J. A., Hessling, R., Gibbons, F. X., Reis-Bergan, M., & Gerrard, M. (2005). Using images to increase exercise behavior: Prototypes versus possible selves. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 610-620.
- Salkovskis, P. M. (1985). Obsessional-compulsive problems: A cognitive-behavioural analysis. *Behaviour Research and Therapy*, **23**, 571-583.
- 篠原弘章・勝俣暎史 (2001). 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性——中学生の“感情・態度”および“希望”との関係—— 熊本大学教育学部紀要, **50**, 203-217.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, **65**, 54-60.
- Snyder, C. R., Harris, C., Anderson, J. R., Holleran, S. A., Irving, L. M., Sigmon, S. T., Yoshinobu, L., Gibb, J., Langelle, C., & Harney, P. (1991). The will and the ways: Development and validation of an individual differences model of hope. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 570-585.
- Strathman, A., Gleicher, F., Boninger, D. S., & Edwards, C. S. (1994). The consideration of future consequences: Weighing immediate and distant outcomes of behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 742-752.
- 2007.5.9 受稿, 2007.10.3 受理 —

## Development and Validation of Japanese-version Consideration of Future Consequences Scale

Misa INOUE and Kohki ARIMITSU

Department of Psychology, Komazawa University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16, No. 2, 256-258

This study developed a Japanese version of Consideration of Future Consequences Scale (CFC: Strathman, Gleicher, Boninger, & Edwards, 1994), and examined its reliability and validity with 272 participants. Factor analysis revealed that the Japanese version of CFC scale had one factor structure, as did the original version. Cronbach's alpha of the scale was .74, which showed adequate internal consistency of the scale. The Japanese version CFC had positive correlations with pathways thoughts, agency thoughts, and goal orientation, which indicated the scale's correlational validity.

**Key words:** consideration of future consequences, time perspective, hope, factor analysis